

《ばあん……ぱち……ぱち、ぱち……》

(扉が開く音と、館が燃え広がっていく小さな音)

仔山羊

「……全部燃えちゃってます。」

これで良かったんですか、マスター？」

シヨゴスを倒し、どうにか無事に洋館を脱出した貴方達、二人。

元々自分のものではないのだし、構わないのだと言いたいが……広がっていく火の手は館のあちこの隙間から、火の粉を夜の闇へと散らしている。

時が経てば炎は全体へと広がり、通報され警察や消防などが来るのは時間の問題だろう。

——良くはないかもしれない、面倒になる前に帰った方が良さそうだ。

仔山羊

「そうですか……じゃあ、マスターとはここでお別れ、ですね。」

こほんつ、えー……その、あのような奉仕種族などよりお母様の娘たる私の方が優秀だと示せたとは思いますが、マスターにも満足して頂けたと思うんですけど……どう、でしたか？

……本当は、マスターに助けられずに示せれば良かったのですが、最後に……無様を見せてしまいましたから、実は……ちよつとだけ、心配なのですけど」

こほんつと、貴方をちらりと見て、少女が改まるようにそう聞いてくる。

あれだけ人ではないと尊大な姿を見せていたというのに。

最後の事を気にしてか、妙に自信がなさ気と言うべきか、しおらしくなってしまう様(サマ)が仔山羊という名前の通り、まさに子供といった様子になってしまっていて。

……こんな状況で思うのもおかしいとは思いますが、今までのギャップに奇妙な程おかしさを感じてしまつて、くすりと貴方は小さな笑みを零してしまう。

仔山羊

「んんっ？！な、なんですかその反応は！？」

ま、マスター……まさか、私の活躍が不満だったとでも言うんですか！？」

それとも、まさかあのシヨゴスが言つてたような狙いが……？いえでも、助けてくれたのですから違うと思いますし……めええええ！！」

少女は笑われた理由が分からなかったようで、自信なさ気に貴方を上目遣いに見つめてくる。

困つたようなその顔は、先ほどまでの違いが際立つようで、余計に可愛らしいものであった。

——大丈夫、君が来てくれて本当に良かった。

——君は願いの通りに振舞つただけで、助けるつもりなんていうのはなかったかもしれないけれど、それでもとても助かったと思つている。感謝してるよ……有難う。

そう、言葉を伝える貴方。

途端、ほつとしたように少女が吐息を洩らし、唇を綻ばせ破顔する。

仔山羊

「あつ……そ、そうですよね！」

ふふ、この“千の仔を孕みし黒山羊”の娘たる私ならば、当然の結果です！……ふふ、えへん」

彼女の嬉しそうな笑みに釣られ、貴方も余計に頬が緩む。

そうして、何とも奇妙な安堵と充実感を味わいながら、しばし貴方達は笑い合い。

仔山羊

「ふう……まあ、でもです、その。

……人間などという下等な存在の割りには、マスター……貴方も中々の活躍だったと思いますよ？

願った事はとても愚かで、お母様に願うにはあまりに傲慢だったとは今でも思ってるですけど。

あんな奴の妄言のような様子もないですし。ええ……私は、割と……矮小でも貴方のような相手と一緒にいるの楽しかった、です」

短い間だったが、人間に使役されるにしてみれば中々楽しい経験だったと、満更でもなさ気に黒い仔山羊と呼ばれる少女は、ほんの少し……恥ずかしさとも、嬉しさともつかぬ言葉を、そっと呟いた。人でないからこそなのか、嘘をつくという事を知らぬような彼女のその態度が何ともこそばゆく、貴方までつい恥ずかしくなってしまうような……そんな態度であった。

仔山羊

「む……？何を変な顔をしているんですか、マスター！

私はあくまでお母様の娘なのですから、甘くみてるならあのショゴス動揺、後悔する羽目になりますよ！

ですから、そんな慈しむような、優しげな顔は……むう、マスターそういうのは、その……お母様への不敬です！

……ちよつと腹が立ちました、こつち来て下さい。許せないから……オシオキです！」

貴方の表情に気付き、小さく頬を膨らませるようにして少女が声をあげる。

機嫌を損ねたのかと、彼女がどういう存在だったかを思い返して軽い恐怖が沸いてくるが、貴方はその言葉に従い、恐る恐る彼女へと近づいた。

仔山羊

「もつと、こつちです……こつち、しゃがんで顔を寄せて、目を閉じて下さい！

……これ、私を馬鹿にしたオシオキですから。避けちゃ……ダメですよ？」

貴方を目の前まで近づかせ、ぶすつとしたような声で少女は言い聞かせるよう、貴方をしゃがませる。

そして、オシオキと言いながらゆつくりと、今まで様々な形に変化を見せ、恐ろしい威力を見せた艶のあるさらりとした髪を揺らしながら、貴方に顔を近づけて……。

仔山羊

「ちゅっ」

……お母様程の力はないでしょうけど、私の残り香をマスターに擦り付け、です」

今度また、私たちのような、お母様や他の神に関わるような存在に会った時とか、少しは怯ませられるかもしれませんからね。

ふふ、他の存在から避けられるなんて、オシオキとしてピッタリです！

……なんて、少しは楽しかったから……ちよつとだけお礼です。

あんな無様で無礼な詠唱を今後もしたら、人間の命なんて簡単に消えてしまいますから、そうならないよう……少しかだけ、サービスです、よ？」

唇に彼女から飲まされたミルクのように甘い香りと、それ以上に柔らかく、暖かな感触を感じて目を開くと。

照れ臭そうな顔をした少女がそう言つて……ふわりと笑みを浮かべた。

シルクのようなめらかな彼女の髪は形を変えろといった事もなく。

本当に、ただ、その小さな祝福を送りたかったのだと伝えるように、優しく貴方の頬を撫でていつた。

仔山羊

「ほんっ！」

それでは、今度こそさようならです！……私を招来した愚かなマスター？

私の役目は終わりました。さあ私を、お母様の下へ……」

柔らかな笑みを浮かべたまま、黒い仔山羊の名を持つ少女はそつと瞳を閉じ……貴方の言葉を待った。

貴方が、知っているであろう……役目を終えた彼女を、母の下へと送り返してくれるであろう、その呪文を。

思わぬ可愛らしいキスに嬉しさと戸惑い、そして別れの時が来たのだという微かな寂しさを覚えながらも、彼女の言葉に頷き。

彼女が望んでいる呪文を唱えようと、貴方は持ち出していた書物を手に構え……そして、はたと気づいた。

——あのさ……帰還の呪文つて、どれ？

仔山羊

「……はい？」

考えてみれば当然のことながら、貴方はあの奇妙な文字が読める訳ではない。

そして、彼女を招来させる事が出来たのも偶然……偶々、元々の持ち主であつたあの洋館の主がそこだけを抜き出していたからに過ぎないのだ。

勿論、貴方はあの館から持ち出した書物を幾ら読もうとしても……意味の分からぬ奇怪で不快な、線の羅列としか見えず、理解など出来るはずがない。

仔山羊

「は？……え？はい？」

マスター、あの……私こんな所でそんな悪ふざけを聞きたいなんて思つてないです。

まさかとは思いますが、本当に人間如きが……お母様の娘たる私の事を、黒い仔山羊というものを甘く見てるんですか？ねえ……まあすたあー？」

ぐにやり……と、先ほどまではあんなに滑らかだつた彼女の髪が、蛇が鎌首を持ち上げるかのようには蠢き始める。

少女の目には怪しげな輝きが満ち、どういふつもりなのかと……冗談は許さないとばかりに貴方の目を射抜くようにねめつける。

彼女の声と様子が完全に変わった事に、命の危機を本気で感じた貴方は、慌てて首を横に振り、叫んだ。

——知らない！知らないんだ！

——そもそもこの洋館に来るのも初めてで、君を呼んだのだって偶然で！

——君みたいな存在も、あの化け物なんかも初めて知った！自分は……何も、知らないんだ！！
少しでも嘘を言えば、その瞬間にあのシヨゴスという化け物と渡り合った力が、自身の身に降りかかると感じた貴方は、必死な思いで彼女に真実を告げる。
嘘などない、自分は本当に何一つ知らずに……ただ巻き込まれただけなのだと、そう伝えるために。

仔山羊

「……はへ？え？……え？」

え、ちょ……ちよつと待つて下さいマスター？

だつて、貴方私を招来したじゃないですか！？あれだけの準備して、無様でもしつかり儀式を整えて！？

その全部に、何も……何一つ、関わつてなかったつて言うつもりなんですか！？」

貴方の必死な様子に嘘はないと感じたのか、途端少女が狼狽したように上擦った声をあげる。
貴方は彼女の機嫌を損ねるのを恐れながらも、嘘をつけばそちらの方が危険だと……ごくりと唾を飲みながら、ゆつくりと頷いてみせるしかなかった。

仔山羊

「ちょ、え……嘘です、だつて！

ま、マスターとして私に力を提供したじゃないですか！

それに、時間があつたのに一度も今までそんな事言わなかったですし……本当に、一つも呪文も知らないんでも言うつもりなんですか！？」

——あの化け物に襲われると警戒してたから、話すタイミングがなかったんだそれに……一応言おうとはしたけど君は話を聞こうとしてくれなかったし……。

仔山羊

「そん、な……うそ……」

告げられた言葉に、少女は真実を悟つたのか。愕然と肩を落とし、膝から崩れ落ちる。

衝撃のあまり言葉を作る事すら出来ぬ様子に、貴方は襲われぬように気をつけながらも慎重に言葉をかけた。

——本はあるんだし、自分で読んで帰るつていうのは……無理、なの？

仔山羊

「私は人間の言葉なんか知りませんし、今回の招来(しょうらい)は本当にイレギュラーで……お母様の気まぐれがあつてのものでした。

ですから、召喚者に帰還の呪文を詠唱して貰つて、ちゃんと見極めまで終わつたと示されない

と……お母様が納得してくれないです」

《がぼっ》

（勢いこめて顔をあげる音）

仔山羊

「どうにか、どうにかしてそれを読んで、お母様への嘆願を覚えて下さい、マスター！！いえ、もうマスターというより……この偽マスター！ダメマスター……！」

私を呼んだの貴方なんですから、マスターとしてそうして貰わないと、私帰れないですよ！？」

感情も露（アラワ）といった様子で、必死に叫ぶ黒い仔山羊の少女。

だが、そんな事言われても……貴方には文字の意味すら分からないのだ。

読みたくても、欠片すら内容は理解出来ないのだから無理は言わないで欲しいと、少女に納得させようとする貴方。

そんな言い争いが、暫し続き……。

仔山羊

「はあ……はあ……ふう。」

分かりました……そういう事ならば、マスター？

私は貴方とこれから、一緒にいさせて貰います。というか、います。いさせなさい。拒否は許さないです！」

激しい言い争いの結果、あがつてしまった息を整えるようにして、少女は大きく息を吸う。

有無を言わさぬと顔を持ち上げ……目の奥には混沌にして漆黒の、人外の化け物であるのだという迫力を滲ませながら、拒否は許さぬと少女は笑う。

仔山羊

「幸い、存在を維持するだけならば私はマスターの精液を定期的に摂取していれば十分のようです。」

確か……人間は100年ぐらい生きるんですよ？

それぐらいなら待てますから、これから死ぬまでに絶対その本を解読出来るようになって貰って、私を帰して貰います……いいですね！！」

逆らうなど許さぬと笑みを強める仔山羊の少女に、そんな無理難題を言われてもと思わず天を仰ぐ貴方。

そんな貴方の様子を見下すように……、或いはもしかしたら。

何処か少しだけ、まだ一種にいられる事に楽しみを感じているかのように瞳を爛々と輝かせ、少女が顔を再び貴方に顔を近づける。

そして今度は、耳元にそつと口を寄せ。

仔山羊

「あんまりサボると……またいっぱい精液絞って、動けなくなっちゃうまでオシオキしちゃいますから。」

気長には待つてあげますけど……私を呼んだ責任、絶対取って貰いますからね？

この……ダメマスター！めええええ……」

ほんの少しだけ嬉しそうに、愉快そうに。
絶対に逃がしはしないぞと宣言するよう、そつと……囁いたのであった。